

氏名	佐々木 愛
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第177号
学位授与の日付	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科東洋史学専攻
学位論文題目	清初期学術成立の背景に関する研究

論文調査委員 (主査) 教授 夫馬 進 教授 杉山 正明 助教授 中砂 明德

### 論文内容の要旨

中国の学術史上、明末清初期とは、学術の主要テーマが、陽明学に代表されるような心のありかたや修養法を問うもの(心性修養の学)から、経書や史書についての実証的な研究へと転換した画期にあたる。本論文は、清初期の著名な学者、毛奇齡をとりあげ、彼の学問形成の過程、および彼の所論を論じることを通して、明代学術と清代のそれとの関係を考察したものである。「はじめに」「おわりに」を除き、二部からなり、かつ第二部は三章および付論にて構成される。

まず「はじめに」では、本論文のねらいが示される。明代の学術から清代のそれへと学風が転換していくなかで、見難くなっている両者の連続性、継承性を明らかにしたいとする。その際、従来の研究で欠けていたのは、特に礼学の分野における明代経学と清代経学との連続性の実証的研究であるとして、課題が設定される。そして、これを実証する恰好の例として毛奇齡の場合をとりあげる、とする。

第一部「毛奇齡の思想遍歴——明末の学風と清初期経学——」では、毛奇齡の思想定立の過程およびその学問観を明らかにする。毛奇齡の学問の特徴は、反朱子学の立場から実証的経書研究をしたことであるが、この基本的立場は、彼が身をおいていた明末の文学運動が復古をめざし、宋代の詩文を批判していたことによって醸成された。この立場は、彼が康熙二十年代に清朝に任官し御用学者となったおり、経学の必要性を認識したこと、当時の北京の宋詩文の流行に反発を感じたことによって確固なものとなり、彼は膨大な、かつ反朱子学にもとづく経書研究の著作を生み出していく。当初、彼は心性修養にかかわる学は研究対象から外していたが、最晩年には心性修養の学の分野にも研究を及ぼし、反朱子学の立場から陽明学へ接近した。陽明学は超知識的唯心論によって修養の階梯から読書を排除する傾向があったが、彼は陽明学の所説を経学と修養とに分離させるものとして用い、実証主義的学術を支え得るものとして陽明学を再解釈しなおし、かくして明代の学術と清代のそれとは折衷された。しかし、そのように陽明学が用いられた時、陽明学の精神そのものはある種の変容をきたしていた、という。

第二部「毛奇齡『辨定祭礼通俗譜』の思想史的位置——中国近世における宗法論——」は、毛奇齡の礼学の著作の一つである『辨定祭礼通俗譜』をとりあげ、その宗法に対する所論を、宋代以来の宗法論の中に位置付けたものである。宗法とは経書に記載された、儒教の理想である古の親族組織法で、つとに春秋時代には漸次崩壊していったとされるものであるが、宋代に至って道学者たちによってその復活が主張されたものである。

第一章「宋代における宗法論」では、宋代道学の系譜の人々、張載・程頤・朱熹の宗法論が考察される。従来の研究では、彼らの宗法復活の主張は、親族の結合による相互扶助をめざした言説であったとして、宋代社会における親族結合運動の一環として理解されてきた。しかし論者は、彼ら道学者が宗法復活の名のもとにめざしたのは、祖先祭祀における嫡長子主祭と嫡長子一子による主祭権の継承の確立であるという。このような嫡長子主義は、当時の中国の一般的親族観念から乖離したものであるがゆえに、彼ら自身その実現が不可能であることを認識していたものであり、宗法復活の主張とは、道学者特有の、古に回帰しようという原理主義的な思想傾向から生まれたものであり、宋代社会における親族結合への動きとは関係

のない、思想的文脈から発せられた言説であると述べる。

第二章「明代における宗法論」は、明代において提起された宗法論が考察される。明代では、理想ではなく現実に立脚した議論がなされ、宗法復活、即ち嫡長子主義の復活は実践不可能であるとし、論者によっては宗法は理想とするに足らずといった厳しい批判がむけられていくことになった。そしてその一方、現実社会において親族の結合運動がすすむ中、『族譜』の序文などにおいて、嫡長子主義については触れないまま宗法を親族結合のための言説とする理解が提示され、広がって行く。そしてこの二つの流れの中で、宗法の嫡長子主義を親族結合に利するように解釈しようという動きも生まれた、と述べる。

第三章「毛奇齡『辨定祭礼通俗譜』における宗法」では、毛奇齡の『辨定祭礼通俗譜』の中にみえる宗法論が考察される。毛奇齡は、上述の明人の宗法理解を継承し、その上にたつて、博学な経書の知識に基づき、現実に即した祖先祭祀法を新たに構築し提示した。毛奇齡は「貴い者を貴ぶ」「すべての祭りは子が行う」という二つのテーゼこそ礼経の古義であると主張し、宗法の嫡長子主義を批判した。しかしその一方、親族結合という宗法の遺義を生かすためとして、一族の長支長孫によって主祭権が継承される宗堂の祭祀を設定した、という。

付論「程頤・朱熹の再嫁批判の言説をめぐって」は、第一章「宋代の宗法論」に対して付せられたものである。程頤はたとえ餓死しても未亡人は再嫁してはならない（「餓死は事極めて小なるも、失節は事極めて大なり」と主張し、その主張を朱熹は支持した。それは、一つの物事に二つの理は認められないという思想的立場から生まれたものであり、経書で礼として認められていた経済的事由による再嫁を「理」の位置から降ろし、不再嫁守節こそが唯一の理であることを示そうとしたものにすぎず、現実に未亡人の再嫁をおしなべて禁じようと考えたのではない、と述べる。そして、その発言は宋代という当時において、決して経済的に困窮していない寡婦が多く再嫁していたという現実に対する批判としてなされたものであって、たとえ現実社会にかかわる問題であっても、現実ではなく理想の如何に立脚して論じる論法は宗法論と共通しているという。

「おわりに」では、以上の二部を総括し、清初期の学者毛奇齡は、実証的な経学研究を行い清朝考証学の祖とみなされているものの、彼の学問観とその所説の中からは、明代の学術からの継承性が濃厚に見とれることを述べる。

### 論文審査の結果の要旨

中国明代から清代への思想及び学術の推移については、明代を代表する陽明学から清代を代表する考証学への推移、として把握するのが一般的である。それは心のあり方や修養の方法を学の主要課題とするもの（心性修養の学）から、経書や史書についての実証的な研究への転換、と捉えることができる。なぜこのような変化が起こったのかについては、実証精神を欠く陽明学が口先だけの議論を生み出すに至り、明朝滅亡の一因もここにあったとする反省から考証学が生まれた、とする「反動説」が梁啓超によって唱えられて以来、明清両代の思想学術に断絶性を見出す見方と、逆に連続性を見ようとする見方の双方から、様々な主張がなされてきた。本論は基本的には両代の学術に連続性を認める見方に立脚しつつ、毛奇齡という明末清初を生きた一学者に即して論を展開する。なかでも毛奇齡の礼学研究にいたる明清の礼学の連続性を論じたのは、本論が始めてであって、そこには数多くの創見が見られる。その主なものとしては、次ぎの諸点がある。

まず第一に、毛奇齡において陽明学を信奉することと考証学とがどのように併存していたのか、始めて合理的な解釈をなし得たことである。毛奇齡といえ、これまで奇矯なまでに論争好きで徳性に劣った人物として、しかもその考証においては誤りの多い学者として、近現代の研究者にとっては必ずしも人気の高い学者ではなかった。論者は後に述べるように、「礼学」史上における毛奇齡の重要性に始めて着目し、あえて毛奇齡を研究対象として選んだ。そして彼の思想遍歴を追うことによって、毛奇齡はまず明末に宋代の詩・文を批判し文学上の復古を目指す古文辞派の一人として出発したこと、次ぎに清朝に登用され、康熙20年代に古代の經典を研究する「経学」に始めて没頭するようになるが、それは当時、御用学者として出世しうる最良の手段であると判断したからであること、陽明学を継承しつつ独自の心性修養論が提起されたのは、やつと康熙40年代中頃になって始まったこと、を明らかにした。毛奇齡の経学研究に鋭い朱子学批判が見られることは既に知られていたが、論者にとってはそれは古文辞派の手法を経学に応用したものにすぎないものとされ、彼の経学が陽明学を止揚して生まれたものであるとか、あるいは陽明学を信奉した結果として経学上の反朱子学を生んだといった見解は、厳に退

けられる。たしかに毛奇齡という一学者の思想遍歴から見れば、論者の主張は極めて説得的である。また康熙20年代になされた宮廷での史書編纂や皇帝への進講のために、古代の制度を研究し理解する必要が生まれ、機を見るに敏な毛奇齡が最も専門家の少ない礼楽分野の経書研究を選んだとするのは、当時の学者の生態を描いたものとして興味深い。

本論の意義の第二は、毛奇齡『辨定祭礼通俗譜』に見える宗法論を高く評価し、これを明代における宗法論の継承であり行き着いた先として位置づけたことである。宗法とは、経書『礼記』に記載された儒教の理想的な親族組織法であり、宋代に『朱子家礼』などでその復活がはかられてから、後世に多大な影響をもたらした。宗法が最も表に現れるのは、先祖を祭る祭祀においてであって、誰が主祭として祭祀を取り仕切る中心人物となり、どの範囲の者を対象として祭り、どの範囲の者が祭りに参加するかは、最も重要な問題として規定される。ところが古の周代では字義どおりの封建制が敷かれ、したがって身分も世襲であったので、身分を世襲する嫡長子が主祭となり、親族を統括していくことで問題がなかったのに対し、宋代以降の科挙官僚制社会にあっては身分は基本的には一代限りのものでしかない。また古くから中国では家産の均分相続がなされ、親族内の各家族は基本的に平等であるとされた。そこで『朱子家礼』に代表される宋代に復活した宗法はその後、いがに現実と折り合いを付けるかに苦勞することとなった。毛奇齡は、封建制や井田制が廃されて久しい現在では、祭祀にあたって「貴い者を貴ぶ」と「すべての祭りは子が行う」という二原則こそが逆に古代の精神に合ったものであると主張し、該博な経書の知識に基づきつつ、現実との折り合いに成功した。すなわち、「貴い者を貴ぶ」ことによって、嫡長子ではないが現実の官僚である弟などが主祭となることができるようになり、また「すべての祭りは子が行う」ことによって、人情に基づき、また現実とも合った祭祀が可能となった。論者は、毛奇齡によるこのような宗法論を高く評価するだけでなく、これに繋がる主張はすでに明代に始まっていたと主張する。すなわち明代の丘濬においてすでに、現実の家族のあり方に基づいて嫡長子主義の復活と実践は不可能とされるに至ったこと、またある学者によっては宗法は理想とするに足りない、とされるまでに至っていたことを論証する。従来、明代の宗法論についてはほとんど研究がなく、しかも清初の宗法論との連続性に着目したものはこれまででなかっただけに、卓見というべきである。

本論の意義の第三は、宋代の一連の学者たち、すなわち張載・程頤・朱熹の宗法論を考察し、彼らの主張が決して一般に考えられているような親族結合を目指したのではなく、それは古への復帰という原理主義的思想傾向から生まれたものであって、宋代社会における宗族結合の動きとは直接に関係がないことを始めて明らかにした点である。宗族という父系の親族集団が、中国人の統合原理として極めて重要なものであったこと、宋代以降には『宗譜』あるいは『族譜』とよぶ一種の家系図が多数作られ、科挙が実施され転変恒ない社会にあって、それが家族の安定と繁栄をもたらし機能を果たしたことは、周知のところである。ところが従来の研究にあっては、宗族に見られる結合原理を宋代の一連の学者によってなされた宗法論のなかに求めようとしてきた。そして彼らの宗法復活の主張は、親族の結合を促し相互扶助を目指した言説として理解されてきた。論者は宋代の宗法論を思想の文脈に即して検討した結果、そこには宋代社会の実態とは相いれない主張が貫かれ、むしろ親族の横のつながりや相互扶助のためには阻止要因となる言説も多いことを論証する。統合原理をもとに宗族研究を行おうとする者が陥りやすい盲点をついたものとして、高く評価できる。

原典の言説については現代語訳がなされており、訓読と比べて読みやすくはあるが、さらにこなれた訳文が工夫されるべきことなど、問題点はもちろんある。しかしこれらは、本論が達成した功績に比べればまさしく瑕瑾と言うべきものであって、今後向上を期待しうる部分である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2001年2月23日、調査委員3名が、論文内容とそれに関係した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。